

## 要約

京都大学人間・環境学研究科 劉青

古代から、人々は長寿延命、心身修養を求めて、努力し続けてきた。そして、古代の東アジア、とりわけ中国において、それは「養生」と呼ばれ、「衛生」「攝生」「長生」「延寿」「延年益寿」等、多様な呼びならわしがある。養生とは、現代でいう健康の管理、増進や、病気の予防、治療、公衆衛生などといった分野を広く含む概念である。

養生思想とその長生を目指す諸技法は、先秦中国文化において芽生え、時代を超えて育まれてきたが、とりわけ明代（1368－1644）には世俗に広く浸透していった。当時、社会経済の安定と生活の向上とともに、士大夫階層にとどまらず、庶民の間でも、長寿延命法への関心が高まり、養生ブームが巻き起こった。また、印刷出版技術の向上に伴い、数多くの養生書も刊行された。さらに、同時代の東アジアも同じように、朝鮮、日本も比較的安定した時代で、経済的にも文化的にも成長期にあった。使臣往来や貿易が頻繁に行われたことで、養生思想は書物の流布を通じて、朝鮮、日本にも伝わり、浸透し広まっていった。朝鮮、日本の近世社会においても人々は長寿を求め、大陸から舶載された養生書を手本として多くの養生関連の著作を著した。

近世における養生思想の形成及び展開の分析では、明初の朱権（1378－1448）が重要な人物の一人である。朱権は明の太祖朱元璋の息子で、明代を代表する文人である。その生涯において医学、養生、道教、音韻、戯曲など幅広い分野に渡って著作を残している。本論文では、そのうち三つの養生書『活人心』『神隱』『寿域神方』に注目し、書誌学的手法を用いてその著作経緯、思想的な特徴を検討した上で、朱権の養生思想の東アジアにおける伝播と受容を分析し、近世養生思想の展開を論じる。本論文では以下の構成にしたがって論考を進めた。

序章では、朱権の生涯や著作を概説した上で、中、日、韓における朱権の生涯、著作、思想に関する研究を整理した。先行研究の整理を通じて、その研究成果と問題点を確認した上で、本研究の問題を提示した。朱権に関する先行研究はそれぞれ優れた成果ではあるが、いずれも主として朱権の生涯、或いは個別の作品のみを扱い、文献的な調査研究であり、朱権の思想に関する全体的な理解には至っていないという傾向がある。巨大な中国思想を対象とする中で、著者の思想を系統的に分析するまでには至っていない。とくに、朱権の養生書を独立したジャンルと捉え、養生書の編集意図や養生思想の特徴を記した研究はほとんどないと言える。また、朱権の著作が朝鮮、日本に伝来しており、朝鮮刊本と日本刊本が幾つか残存している。それに基づき、朱権の養生思想が朝鮮、日本思想史に齎した影響についての研究は現時点では見られない。

上記の問題意識から、第一章「朱権の著作とその時代」では、史料から朱権の生涯と著作を検討した。朱権の性格、境遇に由来する信仰と趣味の変化を考察した上で、当時の藩王政策、出版文化の分析を加え、朱権の著作動機と思想背景を探った。朱権の生涯に関して、「南

昌に移される」時と「宣祖に譴責される」時の二回の転機があり、そこから生涯を三区分して考察した。性格は、傲慢なところがあり、また、才能を発揮する治世の場がなくなり、次第に趣味の世界に入り込んでいった晩年においては、道教の昇仙、煉丹に夢中になっていたと明らかにした。朱権の道教趣味・信仰を分析していくと、養生、医学に対する独自の思考が見えてきて、朱権の著作経緯や養生思想の形成を考える基礎とできた。

第二章「養生書の構成と思想」では、養生書『活人心』『神隠』『寿域神方』に注目し、各本の版本流布や著書意図、養生思想の特徴を検討した。各地に所蔵されている三書の版本を収集し、文献学上の整理を行った上で、各版本の刊行経緯、朝鮮および日本における伝播実態を明らかにした。それに、『活人心』の新しい明刊本を発見し、調査を行った。この明刊本に関する分析は、本研究で初めて行った。『活人心』『神隠』に載せられている養生術、薬方、農業知識について、元代の書物『修真十書』『靈秘十八方』『農桑衣食撮要』などから多く引用、参照していたことを明らかにした。仙術、仙薬に対する考え方では、ただ単に長生、延命を求めることではなく、従来の道教養生術にとどまらず、「仙人」に対する定義を広く捉えていたと見られる。また、実践しやすい養生術や薬方を選別、紹介することを通じて、貴賤、地位を問わず養生術や医術が人々に普及していった明代の傾向が分かった。三書を比較し、そこに第一章で述べた朱権の境遇を関連させ、その思想の形成と特徴の解明を試みた。

第三章「近世養生思想の形成と展開」では、東アジアにおける朱権の養生書と養生思想の伝播と受容を検討した。まずは、明代養生思想の拡がりの中で、とくに朝鮮での伝播を考える基礎研究として、『医方類聚』と李退溪が抄写した『活人心』に注目し、朝鮮国家的な医学書に養生思想がどのように組み込まれていったのか、なぜ大儒李退溪が朱権の養生思想に惹かれたのかについて考察した。次に、日本における伝播と受容を考察するために、室町時代から江戸前期に著された養生書と抄物に注目した。貝原益軒(1630-1714)の『養生訓』を代表に、江戸時代には養生への関心が高まる一方、それ以前にも日本の医家、明経博士たちは中国から伝来した養生思想をいかに取捨選択したのかを考察した。『延寿類要』『三元参贊延寿書』『山居四要抜粹』『養生記』『雖知苦菴養生物語』『延寿撮要』といった書物を取り上げ、『活人心』以外にも、元代の養生書『三元参贊延寿書』『山居四要』などの室町時代における流布を確認した。さらに、朝鮮と日本の医学書での引用内容の比較を通じて、中国近世養生思想に対する受容傾向の差異を明らかにした。

そして終章では、全体をまとめ、今後の研究課題を提示した。中国の近世養生思想については、明初文人朱権の養生書に注目し、その養生思想の特徴を明らかにした。また、それらの流布と受容を分析し、朱権の養生思想が朝鮮、日本でどのように展開したかを考察した。今後の課題については、まず、朱権の道教著作、音楽著作、文学著作にさらなる検討を加え、養生思想の分析と関連させ、朱権思想の全体像を描くことをあげた。次に、朝鮮と日本において明代養生思想の受容傾向に差異が生じていたのは、それぞれの風土や社会、思想形態の影響を強く受けた結果と考えられるが、こうした差異が生じた原因について、両国の思想史研究を参照しつつさらに解明していきたいと考えている。